

華麗なる神宮寺三兄弟の
恋愛事情

??? & Jinguji Brothers

秋桜ヒロロ

Hiroro Akizakura



エタニティ文庫

目次

華麗なる神宮寺三兄弟の恋愛事情

5

書き下ろし番外編

結婚報告

339

華麗なる神宮寺三兄弟の恋愛事情

神宮寺家——天正元年より続く旧家。
現在の当主は神宮寺宏司じんくうしひろしであり、彼は株式会社JINGUじんぐうのCEOも務めている。
彼には三人の息子がおり、数年後には勝手に独立してしまった長男に代わり、次男が跡を継ぐことになっていた。

これは、そんな神宮寺家の三兄弟の物語である。

【長男・神宮寺陸斗の場合】

第一章 社長の調査、始めました。

「あの、大熊さん！ 今日みんなで会員数二十万人突破のお祝いしようって話になったんですけどっ！ よかったら一緒に——」

「ごめんなさい、今日は用事があるの」

帰宅時、声をかけてきた同僚を、大熊美兎みとはバッサリと切り捨てた。笑顔だが有無を言わせないその答えに、声をかけた同僚は狼狽うろたえる。

「あの、ちょっと顔出すだけでも……」

「かえってお邪魔になっちゃいそうだからやめとくわ。また誘って！」

美兎は長い髪を束ねていたゴムを外しながら、颯爽さつそうとフロアの扉に手をかける。肩には鞆たもとをかけていた。

「それじゃ、お疲れ様。私のことは気にしなくていいから、お祝い楽しんできてね！」

「あ、はい……」

呆ける同僚に手を振って、美兎は会社を後にした。

株式会社U・V・i・o・l・e・t・t・eの社長秘書、大熊美兎はいわゆる『できる女』である。仕事はいつも素早く、正確で丁寧。持ち前のコミュニケーション能力と培ってきた語学力で、この三年、社長と会社を支え続けていた。彼女の優秀さは誰もが認める一方で、プライベートは謎に包まれていた。

「やっぱり断られたかあ」

「大熊さん手強いー！」

「誰がどんなに誘っても、飲み会に来ないもんなー。来るのは歓送迎会ぐらいだし！」
美兎の背中を見送った後、社員がわっと盛り上がる。

それと同時に社長室の扉が開き、社長である神宮寺陸斗が顔をのぞかせた。

すらりとした体躯に鼻筋の通った顔立ち。一見温和そうにも見える顔だが、業界では有名な怪傑として知られていた。その手腕は、肘の指を使うが如しと褒めそやされるほど。

顔をのぞかせた陸斗に、女性社員が駆け寄る。

「社長。やっぱり大熊さん来ないらしいですよ」

「そうか」

「社長はどうされますか？ ご予定は……」

「俺もやめておこうかな。読みたい資料もあるし。気が向いたら顔を出すから、後で場所だけ教えておいてくれ」

「はい！」

声をかけた女性社員は、頬を染めながら元氣よく返事をした。

U・V・i・o・l・e・t・t・eは、ファッションレンタルサービス『インクロ』を運営しているベンチャー企業だ。創立は八年前。当時二十四歳の陸斗が友人と一緒に立ち上げた会社だった。今ではインターネットのショッピングの他に実店舗も構える。自宅に届き、試着をして気に入ったら購入できるサービス『チョイクロ』も運営している。『インクロ』は『インフィニティ・クローゼット』の、『チョイクロ』は『チョイス・クローゼット』の略語である。

会社自体は大きいが歴史は浅い。なので、こうやって気軽に話せるぐらいには社長と社員の距離も近かった。

「社長は大熊さんのプライベート、何か知らないんですか？ 付き合いたいですよね？」

陸斗よりも年上の男性社員がそう聞いてきて、陸斗は首をひねった。

「確かに付き合いは長い、プライベートな話なんてほとんどしないから。秘書を任せているのも、ここ三年ぐらいだし」

「大熊さんっていつ入社ですっけ？ たしか今二十七歳だから……」

「入社はちょうど『インクロ』の事業を始めたぐらいの時期だな。初めてかけた新卒の募集に、あいつが応募してきたんだ。今年で五年目になるのか」

「五年目かあ。そう考えると、割と初期のメンバーですよね！」

「ま、そういうことになるな。……今はあんな感じだが、最初は結構ドジもやらかしたんだぞ」

陸斗は目を細めながら懐かしむ。今は採用担当に任せているが、あの頃は一次面接から陸斗が行っていた。

リクルート姿の初々しい美兎の姿を思い出し、陸斗の頬はわずかに緩む。

「へえ。あの、大熊さんがねえ」

「今は『ザ・完全無欠』って感じだもんね」

「新卒の大熊さん、見てみたかったなあ」

「……けど、それだけ付き合いが長いのに、プライベートなことは何も知らないんですよ」

ふいにかげられた若い社員の言葉に、陸斗はムツと顔をしかめる。彼女のことを『知

らない』と評されたのが、なんだか気に入らない。

普段もそうだが、忙しい時はそれこそ文字通り四六時中一緒にいるのだ。宿の部屋はもちろん別だが、出張にだって一緒に行くこともある。ここ数年で美兎と一番長い時間を過ごしている人間は自分だと、はっきりと言いつけることができた。

そんな思いから、陸斗の声はわずかに硬くなる。

「そんなことはない。もう何年も一緒にいるんだから、たいいていのことはわかっているつもりだ」

「でも、プライベートなことは知らないですよね？」

間髪容れずに発された一言に、陸斗は「それは……」と一瞬言いよどむ。

「別に、何もかもをさらけ出すことが信頼の証あかしというわけではないだろう？ 俺はわかまえてるだけだ」

『知らない』のではなく、『踏み込まない』だけなのだと言っ、陸斗は腕を組む。自分でもなんでこんなにムキになるのかわからない。『知らない』のならば『知らない』と言えばいいだけなのに、その一言を言うのを躊躇ちゅうちゆしてしまう。

「それなら、大熊さんが付き合っている人のことについて知っていますか？」

「は？ 付き合っている人!?」

思わぬ情報に、陸斗らしからぬ素っ頓狂とんきやうな声が出た。

すると、噂好きの女性社員がぐっと顔を寄せてくる。その瞳はイキイキと輝いていた。「大熊さんがこういう飲み会に来ないので、彼氏がいるからじゃないかって噂になってるんですよ！」

「そうそう！ ヤキモチ焼きの彼氏が止めてるんじゃないかって話で……」
「それはない」

陸斗の口から、被せるように否定の言葉が飛び出した。もはや脊髄反射の勢いだ。

美兎とは結構な時間を共有しているはずだが、今まで男の影など一切感じたことがない。指輪をしているところなんて見たことがないし、アクセサリーが急に男性から贈られたようなダサいものにならなくなっていたためでもない。誰かからの連絡を待つようにスマホを気にしているそぶりもないし、クリスマスやバレンタインデーのような恋人たちのイベントの日に、急遽泊まりがけの仕事を入れても嫌な顔一つしたことがない。

そんな彼女に、彼氏がいると思うだろうか。

陸斗の答えは『否』だった。

(大熊に限ってそれはない)

それは確信というより、どこか願いに近かった。

しかし、そんな彼の願いはあっけなく吹き飛ばされることとなる。

「いやでも！ 見たって人がいるんですよ！ 大熊さんが男性と仲よく歩いているの！」

「は？」

「しかも、腕を組んでたって！」

「腕!?!」

「楽しそうにケーキを食べさせあいつこしてたって目撃情報も……」

言葉もなく立ち尽くしてしまった社長をよそに、社員たちはきゃつきゃと盛り上がっている。

「どんな人だったって?」

「大柄で、いかつい感じのイケメンだったらいいぞ！」

「きゃあ！ 同じイケメンでも社長とは違うタイプなんですわね！」

「好みが分かれるところねえ。私としては……」

「おい」

陸斗の低い声に、社員たちは固まった。眉間に皺を寄せた状態で、不機嫌さを隠しめせず腕を組んでいる。

「あ、すみま——」

「その情報提供者は誰だ。今すぐ教えろ」

今まで見たことない剣幕に、詰め寄せられた社員は頷くことしかできなかった。



「姉ちゃんもさ。もうちょっと会社の人と付き合ったらいいのに」

「ええー。なんでよ」

リビングからかけられた声に、キッチンにいる美兔は唇をとがらせた。手にはできたばかりの野菜炒めが入ったフライパン。隣にはスーブの入った鍋が火にかけられていた。美兔は手早くそれらを皿に盛り付ける。すると、先ほどの声の主が、キッチンのほうへと顔をのぞかせた。そして、美兔の手から野菜炒めが盛られた大皿を取る。「持っていく」

「それじゃ、お願い」

美兔よりも頭一つ以上背が高い彼は、大皿をリビングのローテーブルへ運ぶと、慣れた手つきで二人分の取り皿と箸を用意した。その間に美兔はご飯をよそう。

彼は大熊知己^{ともしき}。美兔より八歳年下の弟である。何かスポーツでもやっていそうなくらい身体は大きく、頭もスポーツ選手のようにツーブロックに刈り上げていた。顔の彫りが深く、髪も明るく染めているので、一見すると外国人のように見える。見てくれの通り、スポーツは得意だが、今は実家近くの大学で建築を学んでいた。

二人は向かい合わせて座り、手を合わせる。そして「いただきます」と声を重ねた。

「さっき、『会社の飲み会に誘われたんだけど、断って帰ってきた』って言ってたじゃん？ このままじゃ、本当に姉ちゃん嫁^いき遅れちゃいそうでさー」

野菜炒めの一口目を口に入れた瞬間、先ほどの話の続きと言わんばかりに、知己がそう言った。美兔はしかめっ面のまま、口に入った野菜炒めを呑み込む。

「何で会社の飲み会を断つたのと、私が嫁^いき遅れるのが関係あるのよ」

「だって、会社の飲み会って出会いが転がってそうじゃん？ 同僚と仲よくなったり、紹介してもらったり」

「転がってるわけじゃないでしょ。あんなのお金がかかるだけで、別にたいした話をするわけじゃないんだから」

呆れたといわんばかりに、美兔はため息をつく。そしてふたたび野菜炒めに箸をのばした。

「そもそも嫁^いき遅れたって、別にいいじゃない。私が結婚しようがしまいが知己に関係ないんだし」

「いいや、関係あるね。俺、将来姉ちゃんの介護したくねえもん」

「なんで今からそこまで想像を膨らませるかなあ。何十年後の話よ、それ」

「俺的には今すぐ結婚は無理でも、せめて恋人ぐらいは作ってほしい！」

「知ってる？　そういうの余計なお世話っていうのよ」
 弟の嘆願を美兎ははねのける。そんな姉を一瞥して、知己は目の前の取り皿に視線を落とした。

「でもさ。冗談抜きで、姉ちゃんには幸せになってもらいたいんだって」
 らしくない真剣な声のトーンに、美兎は箸を止めて視線を上げた。

「このまま姉ちゃんが独り身だったら、絶対俺のせいじゃん」

「そんなわけないでしょ。馬鹿ね」

知己の愛いを晴らすように、美兎は軽く笑った。

美兎と知己は姉弟であり、お互いに唯一の家族だった。両親は美兎が大学三年生の時に事故で亡くなっており、弟の知己はそれから彼女が育てたようなものだ。八歳年下の知己は当時中学一年生だった。

「いや、だって。姉ちゃんがお金にがめついのって、俺のせいだろ？」

「がめついつて言うな。がめついつて。あと、何度も言うけど儉約は単に私の趣味よ！
 知己が気にすることじゃないの！」

美兎の趣味は預金通帳を眺めることだ。好きな日は給料が入る毎月二十五日。好きな言葉は『特売』『半額』。嫌いな言葉は『浪費』『割高』である。知己を育てていく過程で目覚めた趣味ではあるが、別に彼のせいというわけではない。

現に、死んだ両親の残してくれたお金やら保険金やらで、金銭的にはさほど苦労はしていないのだ。ローンを払い終わったマンションだってある。だからといって、浪費ができるほど裕福ではないし、いざという時のため貯金には手を付けないようにと努力している。

しかし、そのことを何度説明しても知己は納得していないようだった。

「でも、会社の飲み会とかを断ってるのって『お金がかかるから』だろ？」

「そりゃまあ……そうだけど……」

「合コンとか、同窓会にも行かないよな？」

「だって、そんなことでお金使うのもつたいないじゃない。会いたい人には同窓会なんか行かなくても会えるわけだし」

「そういうところだって！」

知己は大げさに肩を落とし、首を振った。

「ああいう場に行かないから、出会いもないんだって。ただでさえ学生時代は、バイトと勉強ばかりで全然遊んでなかったんだし」

「そんなこと——」

「ある！　何年も姉ちゃんを見てきた俺が言うんだから間違いない！」
 いつになく強気な知己の態度に、美兎は困って頬を掻いた。

「というか、最後に恋人いたのいつだよ！」

「大学一年生の時……かな」

その彼には、両親が死んであれこれと忙しくしている間に浮気をされてしまった。当時はショックだったが、今となつては、早い時期に正体に気づけてよかつたと肯定的に捉えている。

「大学に行かせてもらつてる俺が言うのもなんだけどさ。俺ももう来年で二十歳なんだし、姉ちゃんにはもう少し自分を優先して欲しいんだよ」

どうやら知己は、姉に恋人ができないのは自分のせいだと思ひ込んでいるようだった。美兎としては単にそっちに興味が湧かなかつただけなのであるが、彼はそれをいまいち理解できないらしい。

(結婚ね……)

美兎は箸を進めながら逡巡する。

仕事は充実しているし、このまま一生独身でもそれなりになんとかなるくらいの稼ぎはある。そもそも、結婚＝幸せとは限らないのが昨今の常識だ。

しかし、彼が気に病むのならば重い腰を上げるべきなのだろう。結婚とまではいかなくても、せめて恋人ぐらゐは作つて弟を安心させるべきなのかもしれない。

(でも、恋愛つてお金がかかるのよねー)

デートをするための費用や、化粧品や洋服代。記念日にはプレゼントも必要だろうし。それなりに関係が進めば、旅行に行くこともあるだろう。

守銭奴で儉約家な美兎だが、その辺りは禍根を残さないように折半が望ましいと考えていた。全部出してもらつておいて、別れた後に「金を返せ！」とトラブルになつても仕方がない。そういう例も友人から聞いたことがある。さすがにラのつくホテル代ぐらゐは出してくれる殿方と恋愛がしたいが、折半と言われても別に構わない。

そう考えると、やはり恋愛には金がかかる。

(今、貯金いくらあつたっけ?)

ただでさえ知己の学費もかさんでいるのだ。両親の残したお金があるとはいへ、自分のことあまりお金を割きたくはないというのが美兎の本音だった。

(恋愛の前に、副業でも始めようかしら)

U i o l e t t e は副業禁止の会社ではなかつたはずだ。しかし、いつ何時呼び出されるかわからない社長秘書に、そんな時間的余裕があるわけもない。

(なんかいい感じの臨時収入とかないかしら)

ゴロゴロと野菜の入ったスूप椀に口を付けながら、美兎は自分の預金残高に思いを馳せるのであつた。



翌日、美兎が出勤すると、後輩の南田楓が頬を膨らませていた。

「もー、美兎さん！　なんで昨日の飲み会来てくれなかったんですかー！　秘書課で来てるの私一人だけだったんで、超寂しかったんですよ！」

「ごめんね。ちよっと用事があったから」

「毎回それじゃないですかー！」

全身で『怒っている』を表現している楓は、美兎の三つ下。大変可愛らしくあどけない相貌に、大きな瞳。庇護欲をかき立てられるような低めの身長に、たわわな胸が特徴の女性である。しゃべり方や明るすぎる性格から、ちよっと抜けていそうな印象を周りに与える彼女だが、これでどうして大変に優秀なのだから人はわからないものだ。

「美兎さんがあまりにも飲み会に参加しないから、他の課では何やら噂されまくってますよ！　それとも噂通りに束縛ヤンデレ気味な彼氏がいるんですか!?」

「なに、その束縛ヤンデレ気味な彼氏って。響きだけですごく怖いんだけど」

「そういう噂です！　さて真相は？」

「噂は噂です」

はつきりとそう言い放ち、美兎は自分のデスクに鞆を置いた。

現在、社長秘書は三人いる。美兎と楓とあと一人、来栖奏汰という男性だ。

社長のスケジュール等を管理しているのが美兎で、書類や資料を作るのが楓。その他、雑務もろもろと運転手を務めているのが来栖である。と言ってもほとんどの場合、陸斗は自ら社用車を運転して、一人でどこへでも行ってしまいうので、来栖の仕事は基本的に雑務ばかりなのが現状だ。運転手を必要とするのは、人が集まるパーティや、会議の場所に行く時だけである。

どうやら来栖はまだ出勤していないようだった。

「あ、そういうえば！　社長が美兎さんが出社したら社長室に顔出すようになって言っていましたよ」

「社長室に？」

「また何か突飛な用事でも入れたんじゃないですか？　それで諸々スケジュールを調整してくれて話じゃ……」

「……あり得るわね」

美兎は深く頷いた。

陸斗のスケジュールは過密だ。基本的に出社から退社まで分刻みのスケジュールである。会社の方針で、社長共々早出も残業もあまりしないようにしているのだが、時間外

勤務を抑えている分、勤務時間内は目の回るような忙しさなのだ。

にもかかわらず、陸斗は次から次へと自分で新規の仕事を持つてくるものだから、美兎はいつでも大わらわだ。この前だって、いきなりライバル会社との会議を勝手に入れてしまい、そのせいでパズルゲームのような時間捻出を余儀なくされた。

大変働き者で、社員のことを考えてくれるよい社長ではあるが、社長秘書としてはあの仕事好きな面だけは少し直してもらいたいものである。

「どうしようかしら、今月三回目よ？ 来月は大事な会議や出張が目白押しだから、これ以上予定はやらせないし……」

「まあ、ここで悩んでいてもしょうがないじゃないですか！ 案ずるより産むが易しですよ。とりあえず社長室に行ってみてくださいよ！」

「……それもそうね」

「そして、ついでにこの資料を渡してきてください！ 昨日、社長に頼まれたやつです！」

「……楓ちゃんって、案外ちゃっかりしてるわよね」

美兎は楓から資料を受け取ると、秘書室隣の社長室へ向かう。

社長室の扉を開けると、そこには社長である陸斗の他にもう一人見慣れた人間がいた。

「おはようございます。新垣副社長もご無沙汰しております」

「美兎ちゃん、おはよう！ いきなり来ちゃってごめんね。ちょっと話したらすぐ帰る予定だから」

そう言っ手振るのは新垣司。陸斗と一緒にこの会社を立ち上げた人物である。今は実店舗の運営を担っており、各店舗や出店予定地をぐるぐると回る毎日らしい。会議以外で会社に立ち寄るのは一週間に一度ほどしかなく、社長室ぐらいにしか顔を出さないので、美兎が新垣に会うのも数週間ぶりだった。

「まだ勤務時間前なので、お気になさらず」

「勤務時間になったら出て行けっことね。あーあ、美兎ちゃんはやっぱり手厳しいなあ」

「社長のスケジュールは過密ですので」

「ですよー」

新垣は軽い感じで相づちを打つ。

美兎は新垣の奥にいる陸斗に視線を合わせた。

「それで、用事とはなんですか？」

「その、実はスケジュールを調整してもらいたんだ」

「社長、それは……」

「違う！ 俺のじゃなくて、君のスケジュールを調整して欲しいんだ」

陸斗の思いも寄らぬ言葉に、美兎は目を瞬かせた。

「……と、言いますと？」

「実は、来月末のパーティーにこいつが行けなくなってるな」

指したのは、ひらひらと機嫌よく手を振る新垣だ。

美兎は一瞬だけ新垣に視線を移すと、頭の中にある陸斗のスケジュール帳をめくる。

「来月末と言いますと……デザイナー・H I G U C H I 氏の誕生日パーティーのことですか？」

「そうだ。そこで併せて商談をやることになっていただろう？　なのに新垣が……」

「娘のお遊戯会と被ってることに今朝気がついちゃってさー。商談はいつでもできるだろう？　でも、娘のお遊戯会は一年に一度しかないからな！」

「という理由で、行けないと言いついてきた。……まあ、俺としてもそういう理由なら仕方ないと思ってはいたんだが、俺一人だともいろいろいると手に余りそうだから、代わりに誰かもう一人連れて行こうという話になって……」

「それで、私ですか？」

陸斗は頷いた。

「H I G U C H I は海外で活躍しているデザイナーだ。だからこのパーティーにも海外から呼んだ客がたくさん来ることになっている。大熊は語学が堪能だから、万が一、一人

になってもその辺りは困らないだろう？」

「それはそうですが。商談のことについては、内容を記録しておくぐらいしかできませんよ？　商談内容も『チョイクロ』とコラボする、ぐらいしか知りませんし……」

「その辺りは後で資料を見せよう。あと、商談といっても、今までに決まったことのも最終確認ぐらいだから、あまり気負う必要はない」

確かにそれなら資料を読み込んでおけばなんとかなるだろう。美兎は頷いた。

「承知致しました。おそらく大丈夫だと思いますが後で予定を確認して、またもう一度ご報告します」

「ああ」

陸斗はいつも通りに返事をした後、今度は何か迷うように視線をさまよわせた。

「それで、だ」

「はい。まだ何か？」

「何か、というわけではないんだが。その、……今晩は暇だろうか？」

いつになく弱気な声を出す陸斗に、美兎は首をひねった。

「こんな風に予定を聞かれたことなど今までにない。

「何か急遽予定でも？」

「いや。……今回もそうだが、いつも俺のスケジュールで振り回してばかりだからな。

「労働の意味も含めて食事でもどうかと思ったんだが……」

「食事？ プライベートで、ということですか？ それは……」

美兎の問いかけに何かを察知したのか、陸斗は焦ったように立ち上がった。

「いや、違う！ 待ってくれ！ ドレスを買いに行こう！！ パーティ用のドレスだ。俺のせいで急遽用意することになるだろうから、付き合わせてくれ！」

「それなら結構です」

美兎が笑顔でそうはつきりと断ると、陸斗は固まった。

「経費で落としていいのなら、自分で買いに行きますよ。社長の手を煩わせるわけにはいきませんから」

「いや……」

「それに、社長にはそんな暇がないことを私が一番存じ上げております」

これには何も言えないとばかりに、陸斗は椅子に座り直した。

「念のため、何色のスーツを着ていくかだけ教えていただけますか？ 見合うものを見つけてきます。あと、ブランドはもちろんHIGUCHIのもので揃えますよね？」

「……ああ」

テキパキとした美兎の質問に、陸斗は力なく返事をした。



「フラれてやーんの」

その声は美兎の背中が社長室から消えたすぐ後にかげられた。陸斗はその言葉を発した友人をじっとりとした目で睨み付ける。

「……うるさい」

「ようやく自分の気持ちに気がついたってところか。正直、一生気づかないもんだと思ってたんだが、さすがにそこまでニブちんじゃなかったなあ！」

ニヤニヤと笑う新垣を一瞥して、陸斗は鼻を鳴らしながら窓の外を見た。無視を決め込む算段だ。不機嫌になった陸斗に構うことなく、新垣はさらに笑みを強くした。

「まさか彼氏がいるんじゃないかって噂で、自分の気持ちに気がつくとはなあ。『失って初めて気づく 恋心』ってところか」

「なんだその五・七・五は！ 大体、失っていないし、恋人の件もただの噂だ！」

たまらずといった感じで言葉を返す。

陸斗は昨晩、美兎の彼氏を目撃したという社員を飲み会で質問攻めにした。目撃した社員曰く『確かに美兎は男といたが、それが彼氏だったかはわからない。けれど、とても仲がよさそうに見えた』とのことだったので、陸斗の中では『大熊に彼氏はいない』

となつてゐるらしい。そこには彼の信じたくない心が反映されていた。

「美兎ちゃん綺麗だからなあ。本当に彼氏の一人や二人いてもおかしくなさそうだけど」

「大熊はそんな尻軽な女じゃない。いたとしても一人だ！」

「え？ 一人だったら彼氏いてもいいの？」

「いいわけないだろう！」

勢いのまま、机を叩き立ち上がる。

それを見て、新垣はまたおかしそうにケラケラと笑つた。

「そんなに好きなのに今まで気がつかなかっただなんて、お前つてば本当に自分の気持ちに鈍いよなあ」

目の端にたまつた涙を拭いながら、新垣は続ける。

「俺から見たら、陸斗はもう入社してきた時から美兎ちゃんのこと気になつたぞ」

その言葉に、陸斗の鼻筋に皺しわが寄る。

「そんなわけない！ 五年前からというのは、さすがに話を盛りすぎだ！ よくて一、二年前からに決まつてる！」

「じゃあ、聞けどさ。あの年に入社した人間、美兎ちゃん以外に誰か思い出せるか？」
陸斗はビタリと動きを止めた。そのまましばらく虚空を見つめ、首をひねつた。

「伊藤……」

「それは次の年」

「……坂田」

「彼は中途。お前が引つ張つてきたんだろ？」

「……津島」

「おしい！ 津山つて子はいたぞ。もう辞めたけどなあ！」

陸斗は眉間の皺しわをもむ。

考えてみれば、社員の顔と名前ほとんど把握はあくしているが、入社した時のことを鮮明に思い出せるのは美兎だけである。その事実に行き着き、陸斗は頭が痛くなる思いがした。

「まあ、美兎ちゃんは入社試験の時から割と個性が強烈だったし、わからなくもないんだけどなあ」

陸斗は美兎と初めて会つた時のことを思い出す。初々はつはつしいリクルートスーツに身を包んだ彼女は、背筋を伸ばしたまま、真剣な表情でこうのたまつたのだ。

『私は御社のしつかりとお給料がもらえるとこに惚れ込みました！ 御社に入社させていただいた暁あけには、お給料分の仕事はきっちりさせてくださいたいと思います！』

後にも先にも、入社試験の場で、ああもはっきりと己の欲を出してきたのは彼女だけ

である。これには面接をしていた誰もが度肝を抜かれた。

「あの時、陸斗はなんて返したんだっけ？」

「……覚えてない」

「『まず君には、自分の本音を隠すことから学んでもらわないといけない』……だっ
たかな？」

「覚えてるなら聞くな」

今思い出しても笑ってしまう出会いである。しかし、それ故に印象が強く、美兎の嘘
のつけないまっすぐさが気に入る、入社という運びになったのだ。

「入社してからも彼女の動向を気にしてる感じだったし。割とあからさまだったと思う
けどなあ」

確かに、入社してからも陸斗は『あの馬鹿正直娘は大丈夫か？』と、彼女直属の上司
に何度か確認をしていた。しかし、そんな心配をよそに、彼女はめきめきと頭角を現し、
三年前、前任の社長秘書が独立したのをきっかけに、陸斗の右腕となったのである。

その時にはもう『馬鹿正直娘』ではなく、今の凛々しい『大熊美兎』になっていた。

「本当に彼氏がいると思うか？」

陸斗の問いに新垣は肩をすくめる。

「さあ。でもま、いたら諦めるってわけでもないだろ？」

「……そうだな」

「なら、考えるだけ無駄じゃないか」

新垣のこういうからつとした性格が、陸斗はたまに本当にうらやましくなる。良くも
悪くも考えすぎてしまう自分とはいろいろ正反対だ。思い返してみれば、陸斗と新垣が
会社を立ち上げたのも、彼の『一緒にアパレルショップ経営しないか？』という一言が
きっかけだった。それから一年かけて下地を作り、二十四歳の時に二人は独立したのだ。

「そういうえば、宏司さんから『一度家に帰ってくるように』って連絡があったぞ」

「……なんでお前どころに連絡が行くんだ」

「陸斗が親父さんのこと嫌って、着信拒否にしてるからだろ」

話が自分の父親のことになり、陸斗は難しい顔つきになる。先ほどまでの渋い顔では
なく、暗くよんだ表情だ。

「なんて答えたんだ？」

「いつもの通り『わかりました。伝えておきます』で終わらせたよ。ただ、あんまり無
下になると宏司さんも実力行使してくるかもしれないぞ。一度、顔出しとくのも手じゃ
ないか？」

「……そうだな」

やる気のない声を出しながら、陸斗は一つため息をついた。



「早く行かないとなくなっちゃう！」

仕事を定時で終わらせた美兎は、スーパーに向かって走っていた。その理由は『卵』である。

いつも美兎が行っているスーパーは水曜日になると、毎週卵が一パック九十円になるのだ。美兎はそれを狙っているのである。

卵は客を誘い込むための撒き餌なので数は十分に用意されているのだが、それでも夕方にはなくなってしまうことのほうが多い。定時で仕事を上がり、スーパーまで走っても、最後の一つを目の前でかつさらわれることもしばしばだ。

(よっし！ ちょうど信号がいい感じで変わりそう！)

そう思いながらスピードを上げたその時だ。

けたたましいブレーキ音を響かせて黒塗りの高級車が目の前を塞ぐように止まったのだ。たった今渡ろうと思っていた横断歩道をまたぐ形で止まった高級車に、美兎は一瞬ぶつかりそうになり踏鞴たたらを踏んだ。

「ちょっと、なに!？」

驚きで顔を強ばらせていると、後部座席の窓がゆっくりと開く。そして、五十代後半だと思われる男性が顔をのぞかせた。

(あれ、この顔どこかで……)

「大熊さん?」

「はい!？」

「君の名前は『大熊美兎』さんで合ってるかな?」

優しいのに、妙に威厳を感じる声である。美兎は知らず知らずのうちに背筋を伸ばした。

「そう、ですが」

「そうか」

車に乗っている男性は何やら指で運転手に合図を送る。すると、うしろについてきていた、これまた黒塗りの高級車から、いかつい外国人が三人ほどぞろぞろと出てきた。黒いスーツを纏まとった彼らは、映画でたまに見る富豪のSPのようである。

「君を我が家に招待しよう」

「はい!？」

「それじゃ。よろしく」

抵抗する間もなく、美兎は担がれ、車に乗せられた。

そして、たどり着いたのは――

(「ここ、どこなの……」)

大きなお屋敷だった。

案内がいなければ迷いそうなほどのだだっ広い土地に、大きな日本家屋。廊下から見たのは日本庭園で間違いないだろう。手前には湖のような大きい池があり、自分の給料より高いだろう鯉こいが、悠々と身体をくねらせながら泳いでいた。

そのお屋敷の客間に美兎はいた。身体を強ばらせ、畳の上で正座をしている。目の前の机には高級玉露。口を付けたが、緊張のためか、舌が馬鹿なためか、味はまったくわからなかった。

部屋の外には先ほど自分を拉致したSP風のマッチョたちが待機していた。おそらく彼女を逃さないためにいるのだろう。

美兎は混乱した頭で必死に情報を整理していく。
 (もしかして、なんかやばい人に攫さらわれてきた感じ? 誘拐? 身代金? 人身売買?)

悪い考えが脳裏をよぎり、握っている手に力がこもった。冷や汗も噴き出す。

(いやでも、こんなお屋敷に住んでる人がウチみたいな平々凡々な家庭から身代金を要求するとは思えないし! そもそも、あの顔どこかで見たことある気がするのよね。ど

こだったかしら……)

美兎が記憶を蘇よみがえらせていると、不意にうしろから人の気配がした。振り返ると、美兎を攫さらった張本人が着物姿でそこにいる。彼はうしろ手で戸を閉め、美兎の正面に座った。何が描いてあるかわからない掛け軸と壺を背負う姿は、まるでヤクザの組長のようだ。

「待たせたかね」

「いえ……」

「すまないね、いきなりこんな形で」

目尻しほに皺しわを寄せ、彼は温和そうな笑みを浮かべている。見た目はただの優しそうなおじさんという感じだ。

何を言われるのか見当もつかない美兎は、緊張のあまり生唾なまばなを呑んだ。

「君を招待したのは、息子のことで折り入って頼みがあるからなんだ」

「息子?」

「ああ、神宮寺陸斗。ウチの長男が君にいつもお世話になっているみたいだね」

「あー!」

既視感の正体に、美兎は思わず目の前の人物を指でさしてしまふ。

(そうだ! そうだそうだ! 社長に似てるんだ!!)

ほとんど毎日見ている顔に、目の前の男はそっくりだった。未来からやってきた陸斗

だと言われたら、信じてしまいそうなくらいそっくりな顔つきである。

（——と、いうことは、神宮寺宏司!? JINGUのCEO!?）
驚きの次は、恐怖で顔が引きつった。

JINGUは、日本でスマホなどの電気通信サービスを提供している会社である。シェア率は常にトップを争っており、日本でJINGUの存在を知らない者はまずいないだろう。JINGUはJINGUグループジャパンの傘下であり、そのCEOも現在、神宮寺宏司が兼任していた。

最近では次期CEOである神宮寺成海なるみばかりが経済誌の表紙を飾っているが、数年前までは彼が経済誌の顔だった。

そして、U-Violletteの社長、神宮寺陸斗は彼の息子なのである。

美兎は思わず、その場で頭を下げた。

「し、失礼しました! 社長のお父さんだとはつゆ知らず!!」

「無理もない。最近では、私が表に出ることも減っているからね。それに、今日はどうも個人的な用事で君を呼び出したんだ。だから、そう畏かしこまらなくていい」

「こ、個人的な用事?」

「そう、私は君に折り入って頼みがある」

宏司は居住まいを正す。そして、机の天板に手を置き、深く美兎に頭を下げた。

「どうか、私に陸斗の情報を売ってほしい!」

「はい!?!」

今まで出したことのないような声を上げて、彼女はふたたび頬を引きつらせた。

宏司から話を聞いた美兎は、なるほど、と一人頷いた。

「つまり、私に陸斗社長との仲を取り持つて欲しいと、そう言っているわけですか?」
「そこまではさすがに望んでいないよ。もちろんそうなればいいとは思っているけどね。ただ、陸斗がウチにあまり顔を出さなくなると、もう九年になる。……正直、少し心配なんだよ。あの子は自分のことをまったく話さないから。特に私にはもう何も話してくれないからね」

宏司の話によると、陸斗は大学を出てから今に至るまで、ほとんどこちらの家に帰ってきていないらしい。最後に顔を出したのは、二年前の正月。それ以降は連絡もなく、電話も着信拒否にされているというのだ。なので、連絡はいつも新垣を通して行おこなわれるのだという。

陸斗が家に寄りつかなくなったのは、彼の独立を宏司が反対したのがきっかけらしい。二人とも元々そんなに激高するような性格ではないのだが、その時ばかりは屋敷中に響き渡るような声で怒鳴り合ったのだという。

確かに、後継者にと育てていた長男がいきなり『独立する！』と言いだしたのだ。宏司の止めようとする気持ちもわからなくもない。しかしそのやりとりで、宏司と陸斗の溝は決定的なものになってしまった。

宏司は落ち込んでいるような表情で、じつと下を向く。

「会社の機密を教えてくれと頼んでいるわけじゃないんだ。私は親心として普段の陸斗がどういうことをしているのかが知りたいだけなんだ。何か困っているのなら手助けしてやりたいし、とにかく、状況が知りたい」

「ですが……」

「金なら払う！ だからどうか」

「えっと……」

普通ならばここで突っぱねるべきだろう。どんな理由であれ、親子の複雑な問題に他人が口を出すべきではないからだ。

美兎だってそのことは重々承知していた。しかし――

「たいしたことは調べられないと思いますよ。それこそ、私が調べられる情報は、もう宏司CEOがご存じの情報ばかりになると思います」

「それでもいい！」

「仲直りの手助けになるとは正直思えません」

「それでもだ！」

「好きな色とか、好きな食べ物とか、そういう情報しか集められないかも……」

「それだって知りたい情報だ。是非、頼む!!」

「……はい。わかりました」

彼女は断り切れなかった。

自分が両親を亡くしているせいとか、どうにもこういう類いの頼み事には弱いのである。生きていれば自分の父親もきっと宏司ぐらいの年齢で、同じような悩みで父親や母親に心配をかけていたかもしれない。そう思ったら、子供と仲直りがしたいという宏司の頼みを、美兎は無下に断ることはできなかったのだ。

第二章 一歩進んで

「――と言っても、どうすればいいの……」

宏司に拉致され、変な頼み事を受けてしまっただけから数日後。週末になり、美兎は近所のスーパーで買い物かごの入ったカートを押しながら、こめかみを押さえた。

一週間の食材が入ったかごは山盛りで、今にもあふれてしまいそうだ。

（何でもいいって言ってたけど、宏司CEOはどんな情報が知りたいんだろ。私、社長のプライベートとかほとんど知らないしなあ……）

陸斗との付き合い自体は長いが、秘書をしているのはここ三年ほどの話だ。仲が悪いというわけではないし、むしろ関係は良好だとも思っているが、プライベートをさらけ出すほどの個人的な付き合いはない。

（私知っていることといたら、ああ見えて赤色を好んで身につけることとか、化粧の濃い女性があんまり得意じゃないこととか、サッカー観戦が好きで、ワールドカップの時期はそわそわしていることぐらいかなあ……）

この三年間で見えてきた陸斗のネクタイの色やパーティーでの様子を思い浮かべながら、美兎は知っていることを並べる。

（あと、占いは信じないとか言っている割に、朝の情報番組の占いを妙に意識してることとか、会社を設立して初めて買った万年筆をお守りとしてずっと持ち歩いていることとか……って、こう考えたら私って、結構社長のこと知ってるかも？）

そんなことを考えながらカートを進ませていたからか、前に人がいるのに気づかなかった。カートは見事に前の男性の踵かかととアキレス腱けんに当たり、彼は痛みと驚きで飛び跳ねた。

「いっ！」

「あ、ごめんなさい!! —— って、え? 社長!？」

「お、大熊!？」

美兎がカートをぶつけたのは、先ほどまで頭に思い浮かべていた人物、神宮寺陸斗、その人だった。

いつもはスーツ姿だが、今はジーンズとスウェットパーカー。上にはチェスターコートコートを羽織っている。なんてことない私服だが、彼が着るとどうしておしゃれに見えるのだろうか。

「社長、こんなところでなにしてるんですか?」

「なになって、普通に昼食の買い出しだが」

「昼食……」

興味本位で美兎は陸斗のかごをのぞき見る。そして、絶句した。

かごの中にあっただのは栄養補助食品。ゼリータイプやブロックタイプなど種類は様々だが、基本的には同じものである。それが何十個と山のようにかごの中に入っているのだ。

美兎はそれらを指さし、恐る恐る口を開く。

「……社長。今日は何か急ぎの仕事でもされているんですか?」

ちゃんとした食事もできないほど何かに追われているのではないか、と心配になりそ

う聞けば、陸斗はこともなげに首を振った。

「そういうわけじゃないが。ちょうどストックを切らしててな。ネットで頼んでもよかったんだが、今日の昼には間に合わないだろう？ だから気分転換に直接買いに来たんだ。これから薬局でサプリメントも選ぼうかと……」

「サプリメント……」

「これらだけだと、どうしても栄養が偏ってしまうからな」

さも当たり前だと言わんばかりの彼に、美兎は頭が痛くなる思いがした。

「社長。まさかとは思いますが、毎食こんな食事をしてるわけじゃないですよね？」

「いや。さすがにそれはない」

陸斗の否定に美兎もほっと胸を撫でおろす。しかし、安心したのもつかの間、陸斗の口からとんでもない言葉が飛び出してきた。

「まあ、平日の昼食以外は大体これだがな」

「はあ!？」

話を聞くと、朝は作るのが面倒くさいし、夕食は急に誘われることもあるので材料を揃えての自炊は難しい。最初の頃はデリバリーや外食もしていたらしいのだが、次第に面倒くさくなり、こういう手軽な形に落ち着いたのだという。

陸斗は好き嫌いもなく、食事にあまり頓着しない性格なのは知っていたが、毎朝毎晩、

栄養補助食品で満足できるほど食べることへの関心が低い人間だとは思わなかった。

「社長!」

美兎はぐっと陸斗に顔を寄せる。その瞬間、陸斗の頬がほんのり染まった。

「な、なんだ?」

「今日の昼食、一緒に食べましょう!」

「は?」

陸斗は目を丸くしたまま、不拔けた声を出した。

「どうぞ。適当に作ったものですが」

そう言って出した食事を、陸斗はまじまじと見つめた。

場所は美兎と知己が住んでいるマンションの一室。そのリビングにあるローテーブルの前に陸斗は座っていた。彼の前では、美兎が作ったばかりのオムライスがふわふわと湯気を立てている。隣にはお湯で溶かしただけのコンソメスープ。

「これは?」

「オムライスです」

「それはわかる。俺がわからないのはこの状況なんだが……」

「それは……」

それは確かに美兎にもわからなかった。
 気がついた時には彼の腕を引いて、我に返った時には彼を部屋に招き入れて、
 正気に戻った時には彼のためにフライパンで卵を焼いていたのだ。
 現在のこの状況は、勢いのたまものである。

(いやだって、あんなもので毎食済ませてるとか聞いたらさ……)

放っておけるわけがない。ましてや美兎は世話焼きなのだ。絶対に、口が滑っても言えないが、弟の知己と陸斗が、あの時ばかりは重なってしまった。

(でも、どう言おう。正直に言うのもどうかと思うし……)

飯にも目上の人間を心配するというのはどうなのだろうか。

美兎は自分の分のオムライスを彼の正面の席に置き、そこに座った。

「えっと……、社長に私の手料理を食べてもらいたくありません……」

「急に？」

「はい。それはもう唐突に」

「……嘘だな」

そう断じられてしまえば、黙るほかない。自分でも苦しい言い訳だとは思ったが、どうやらそのまま流させてはくれないようだった。次はどう言おうかと美兎が悩んでいると、正面の陸斗が肩を震わせて笑い始める。

美兎は眉根を寄せ、目を半眼はんがんにさせた。

「……社長？」

「悪い。心配してくれたんだろう？　ありがとう」

「……いえ」

なんだか気恥きはずかしくなり、頬が熱くなった。

「一応聞くが、これは食べてもいいのか？」

「どうぞ。お口に合うかわかりませんが」

「……いただきます」

小さくそう言って、彼はスプーンを取った。そして、表面だけ半生に焼けた卵を裂き、その下のチキンライスと一緒に掬すくい上げた。そうして一口。

「……ん。うまいな」

陸斗が発した一言を聞いて、美兎の身体は弛緩しかんした。どうやら上司に手料理を食べさせるという異常事態に、身体が気づかないうちに緊張していたようだった。

「大熊は食べないのか？」

「食べますよ」

そう答えて、美兎もオムライスを口に運ぶ。卵の焼き加減もチキンライスの味付けもなかなか上出来だ。

「ん」

「うまいだろ？」

「なんで社長が、そこで胸を張るんですか」

「そういえば、なんでだろうな」

陸斗が笑うのにつられて、美兎も笑みを浮かべる。

こうしてよくわからない休日の昼食タイムは始まったのである。



(これはさすがに脈があると思ってもいいんじゃないか?)

オムライスを口に運びながら、陸斗は口元の緩みを必死で隠していた。いきなりスパーで『今日の昼食、一緒に食べましょう!』と言われた時は心底驚いたが、まさかこんなことになるとは思ってもみなかった。

部屋と呼ばれ、手作りの料理を振る舞ってもらい、二人つきりで一緒に食べる。こんな状況、相手に脈がなくてはあり得ない。

しかも、彼女の料理はすごく陸斗好みだった。彼女が料理上手というのはもちろんあるのだろうが、そもそもの味覚が似ているのだと思う。どんな有名フレンチレストラン

のシェフが作ったものだろうが、口に合わない時は合わないからだ。

(これが毎日食べられたら最高だな)

陸斗は『もしも』を想像する。

恋人になった美兎が陸斗のマンションでキッチンに立ちながら「おかえりなさい」と陸斗を出迎える。部屋にはおいしそうな匂いが充満していて、部屋に入ると温かい食事と微笑む美兎の姿があるのだ。

(いい! すごくいい!)

自分の妄想に内心ガッツポーズだ。ゲッジョブ。よくやった。

毎日は無理だろうが、休日なんかは一緒に作っても楽しいだろう。むしろ、陸斗が振る舞ってもいいかもしれない。陸斗は食べ物に興味はないが、料理ができないわけではないのだ。むしろ、得意と言ってもいい。彼女が自分の料理を食べて「おいしい!」と笑ってくれたら……。その想像だけで胸が温かくなる。

いろいろと妄想を膨らませていたせいか、それとも単純に彼女の料理がおいしかったからか。あつという間にオムライスの皿は綺麗きれになっていく。

「ごちそうさまでした」

そう手を合わせたのは、食べ始めてから十五分も経っていない頃だった。陸斗にしては早すぎる記録だ。

「お粗末様でした」

美兎は嬉しそうにそう言うてはにかむ。会社では決して見られないような気の抜けた笑みに、また頬が緩んだ。

(ほんと可愛いな)

知れば知るほど彼女の深みにはまっていく気がする。気づいた時はもう沼の中にいたが、意識を失うと沈んでいく速度はその倍だ。しかも、まだ底が見えない。それがちよつと恐ろしかった。

「大熊は料理が上手なんだな」

「そうですね。基本的に料理は私がやっていますから」

「ん？」

「掃除は知己に任せてます」

「トモキ？」

(トモキ……ちゃん?)

あり得なくはないだろうが、ニュアンス的に男性を指しているのだろう。女性を指すなら、彼女はきつと『トモキさん』や『トモキちゃん』と言うだろうからだ。

(待て、なんで今ここで男の名前が出てくるんだ!?)

陸斗の顔はみるみるうちに強ばっていく。マンションの部屋を見渡し、恐る恐る口を

開いた。

「そういうえば、ここ一人で住むには広くないか？」

「そうですね。二人でもちよつと広いぐらいですからね」

「ふたり？」

「はい」

美兎の肯定に頭痛がした。脳裏に蘇よみがえるのは彼女に恋人がいるという例の噂だ。会社の飲み会に参加するのも嫌う、ヤンデレ彼氏。一部ではそんな風に囁ささやかされている。

「君は、その、トモキとかいうやつと一緒に暮らしてるのか？」

「え？ はい。そうですね」

「そのトモキというのは、実はお父さんだったり？」

「しませんね」

今度は眩暈めまいがする。そんな陸斗の様子に美兎が首をひねったその時だった。

「ただいまー！」

玄関の扉が開く音とともに、元気な声がその場にこえました。

「あ、帰ってきた。おかえりなさい！」

「は？」

「ただいま！ うわあ、なんかめっちゃいいにお……へ？」

「……」

知己と陸斗は互に見つめ合いながら固まる。
 (なんでよりもよって、今帰ってくるんだ……)
 楽しい雰囲気が一気に台無しである。いや、少し前から不穏な空気は流れていたのだが、これに比べれば可愛いものだ。

陸斗は彼女の恋人だろう男をじっと観察する。噂通り確かにイケメンだが、自分のほうが顔がいいし、いろんな意味でスマートだ。見たところ美兎よりもずいぶんと年下のようなので、経済面的にも陸斗のほうが分があるだろう。

(大丈夫だ。同棲しているという事実を除けば、俺のほうが優勢だ！)

一番除いてはならない事実を計算に入れないうまま、陸斗は強ばった表情で頷いた。一方の知己は、知らない男の登場に目を瞬かせていた。

「ねえ、この人誰？」

知己は陸斗に人指し指を向けてくる。普段はそれぐらいで苛つかないが、相手が彼女の恋人(仮)というだけで、その仕草になんだかちよつとムツとした。

「ああ、紹介するわね。この人はうちの会社の社長。神宮寺陸斗さん」

美兎は陸斗のことを手のひらで指しながらそう紹介する。そして、今度はその手を知己に向けた。

「社長、紹介しますね。弟の知己です」

「は？ ……弟？」

「はい。弟です」

思いも寄らぬ答えに、陸斗はしばらく思考回路を停止させたのだった。



「なあんだ、びっくりした！ いきなり姉ちゃんが彼氏連れてきたのかと思ったわー」

「なんでそうなるのよ……」

大学のサークル活動から帰ってきた知己は、陸斗の側であぐらをかいていた。どういうわけか陸斗のことが気に入ったらしく、その距離は近い。同性で気が緩んだのだろうか、陸斗も心なしか安心した表情で知己といくつか会話を交わしていた。

(知己が帰ってきた時、社長の顔が強ばっているような気がしたけど、気のせいだったみたいね！)

美兎は二人を見ながらほっと息をつく。

仲がいいのならこれ以上のことはない。二人が今後会うことはほとんどないかもしれないが、自分の身内と会社の上司が仲が悪いというのも、なんだか面倒くさそうだから